會員通信

パミール高原で見た植物

新岡武彦

いまの日本で三回目とか四回目とか言われるシルクロードブームで、シルクロードについての知識は大なり小なり皆もっているが、このルートのほぼ中央に横たわる大山塊パミール高原に関しては、意外に認識に欠けるようだ。

札幌の緯度にほぼ等しい中央アジアの、中ソ国境に跨がって天山々脈が東西に伸びていて、これに向って南東からカラコルム山脈、南西からはヒンドウークシュ山脈が迫ってきて、一つの巨大な瘤になってパミール高原を形成し、古来シルクロードの大障壁をなしてきた。古くは玄奘三蔵法師が求経の旅の途中で難に遭ったり、マルコ・ポーロが越えて来たところでもある。平均高度は四千mと言われるが、中には五千mと誌した参考書も見られる。

パミールとは現地人の言葉でパーミ・ドウシヤ（世界の屋根）とか、ペルシヤ語のパイ・ミール（山の麓）からきていると言う。漢書西域伝に「其山高大、上に葱を生じ故に葱嶺という」とあり、中国側では以来これを葱嶺と呼ぶ。

私は一九八二年八月、第四回日中友好新疆登山隊というツアーに加えてもらって、中国側のパミール高原に登る機会を得た。私の望みの主なものは二つあって、一つは古代遊牧民の墓といわれる立石をめぐらした墳墓が、モンゴルからパミールにまで分布すると言われているが、果してこの説のとおりなのか、また第二には葱嶺にはそんなにユリ科のネギがたくさん生えているのか、この二点だけはぜひ見てきたいと思った。

「西域伝」に遅れて出た「西河旧事」という本には〝上ことごとく葱を生じ、故に名づく〟とまで書いてあり、モンゴルのアルタイ山脈には正しく日本葱と酷似するものが生えていたので、あるいはネギの群落の間に、他の植物が生えているような状態なのかも知れない、と思って出かけたのである。

一九八二年八月二十日、喀什（カシュガル）の町を出たわれわれのバスは、パミールからタクラマカン砂漠に流れ出る川の一つである、ヤマン・ヤエル川の扇状地に差し掛かった。東に向けて開口する渓谷の幅は四kmほどであろうか、水流は幾つにも分かれて川床が高く、わずかの増水でも流路を変えるようだ。

カシーからここに着くまでの道は、西に高原の雪氷の峰々を遙かに望み、東に砂漠が拡がる緩斜面をなし、多分これは流れを変える幾つかの川が作る扇状地がつながったもので、地平線が水平でなくて一～二パーセントの勾配で傾むいている。かたむいた地平線の大景観など、そうざらに世界にもないだろう。

ヤマン・ヤエル川の扇状地で小憩したので、歩き廻って植物を見る。キク科のヨモギやカワラヨモギ、それにラクダグサも見える。ラクダグサはシカギク属のように思われるが、植物に弱い私の判断だから断定はしかねる。カワラヨモギはパミール西方のソ連領中央アジアでも、昔の日本と同じように箒にしている。草原ですでに枯れている穂は、タデ科のギシギシの仲間のようだ。

渓谷両側の高い断差を形成している岩石は、赤い岩石と青い岩石でできている。赤い方は赤鉄片岩という、硬くて薄片に剝離する岩石である。青い方は緑泥片岩や石墨片岩も含まれていると思うが、元来この山塊は中世代の地層と、これを貫く閃緑岩や花崗岩・はんれい岩などで出来ていて、東側つまり中国側の方が特に押上げられた地塁をなし、こちらが地質的に古くて、古生代などの青い岩石が多いようだ。パミールの最高峰コングール（七七一九m）や雪山の父と呼ばれる名山ムスタグアタ峰（七五五五m）などは、すべて東側が断崖で西には緩い裾野を曳いていて、周氷河地形の標本が見られる。

さて、ヤマン・ヤエル川を溯ると谷は益々狭く急になり、いまにも崩落しそうな崖下の道を辿って、三千四百～三千七百mと言われるカラクリ湖畔に翌日つき、湖畔の植物を見て廻ったが、まばらに生えているイネ科・莎草科・キンポウゲ科・マメ科・キク科タンポポ属の五種類の植物と、湖中のイバラモ科ホッスモに似たもの以外私の目には映らない。

マメ科は小形のゲンゲ属のようで、タンポポも小さくてロゼット状の下葉には切込みのないものであった。

肝心のネギの仲間と環状石列墓らしいものは、下山途中の全速で走るバスの窓から僅かに一カ所、ブルンクルという湖畔でち

らと見えたように思われただけである。パミールは早壮年期の山容の山で、氷河期が少し前に終って、植物はまだ上まで登って行く暇がなかったという感じである。登山路途中のゲズというところで、同行の大学生が撮った写真の中には、ナデシコ科やサクラソウ科らしい植物がある。

さてそれでは葱がないのに、あるいはあっても稀なのに、なぜ葱嶺と名がついたのか。

葱には蒼と同じように青の意と、草木のよく繁茂するという意味があるが、おそらく青い岩石の山に蒼い雪氷を頂いた巨大な山容こそ、この名の由来にふさわしいものでなかろうか。

（枝幸町北陽工業KK社長）

函館山の朝の散歩から

臼倉としし

まず自己紹介をします。八年前の四月のある夜更のことです。その日も相変らず世にいう〝宵っぱりの朝寝坊〟が数人煙草の煙をもうもうと吐きながら憎らしいほど元気に勝手なお喋りをしていました。順良な市民なら大抵は安らかな寝息を立てている頃なのに。だから決めたのです。朝の六時に集合して函館山を一時間ブラリと散歩して解散、それから帰宅、朝食、出勤、仕事という寸法の一日をやってみようと。なんのことはない、寝坊症の治療みたいなことだったのですが、その時季が四月だったのは本当に好運でした。

キラリと輝きながら昇る陽の光が斜めの影を道に移して動き、ヒンヤリとした朝特有の美味しい空気、鋭く空を切る木々の梢、足元の灌木からケッチョケッチョとしか鳴けない鶯、踏みしめる足の裏から傳わってくる躍動する生命力。そして朝の散歩が生まれました。一口に函館山といっても、三三四mの御殿山を先鋒に汐見、観音、薬師、千畳敷、地蔵、鞍掛など十以上の峰々が連なる一大山塊の總称で、それがドンと津軽海峡に突き出して聳えているから眺望も変化に富み、峰々の連なりは谷の重なりとなり、同じ方位でも陽当りの差違が生じ、それが植生となって現われるので、われら素人にも面白く飽きることがありません。

ご夫婦で一年中毎日登っておいでの方がいられるとの噂を聞いて、勇気づき、三年前から冬山も歩くようになりました。散歩は主に山の中腹を横這いに歩くのですが、山の様子が少し違って来ているのに気づいたのは、われらが前に喜んで名づけたコゴミ畠もウバユリ畠も、またキツリフネの里も消え失せた時からです。旧道の道幅と梢越しの空が広く全体に明るくなって、妖精も見えない。そしてその道に電話のケーブル取替工事とかで大きな穴が幾つも掘られ、コンクリートが流し込まれているのに出逢ったのです。改めて山頂を見ると、峰の幾つかにアンテナが立ち、またアスファルト舗装の駐車場に覆われてる峰もあり、中でも一番高い御殿山には展望台とロープウエーの建物、駐車場それにアンテナも数本立ち壮観なものです。消えたコゴミ畠も、風が吹けば桶屋が喜ぶ方式なのかもしれない。函館山は植物の種類が多くしかも豊富で、渡り鳥も沢山くるのは海峡とブラキストンラインにあるという地理的条件と、また要塞にされ市民の入山を禁じた故と聞きました。

散歩から帰って考えた「戦争は人を殺し、平和は山の緑を殺す」この実態は何故。こう抽出してみると、殺される相手が異なっても殺し屋は外ならぬ人間様ということが確かになり残念。人間はこの大自然の一生物に過ぎず、他の生物と共に生存している実態をおろそかにし、早い話が緑を失えば人間の食糧を失うことで、緑の問題は単に山の景観の問題から飛び出して仕舞った。しかし青い鳥は身近に。そこでまた考える。

自然も人間も生きものだが、物理の原則の慣性を持ち生まれ変り死に変っても存在し続けようとするエネルギーとなって深く内蔵され、相方の変化に対応して働き、その動きには一定の法則があるように感じられるのです。もしそうだとすればその法則は理であり、理は知によって至るという希望を私は持ちたい。人々の自然に対する関心と理解があれば夢ではない。諸先生にお願い致します。毎日、各家庭に配達される新聞の紙面を使って、私達素人にも解るよう易しく自然の理を説き、啓蒙して下さい。

（朝の散歩の会事務局長）

ハンガリーの自然と人

石本礼子

ハンガリーは東欧、東欧とはいわゆる〝東側〟の国、と日本では思うが、ハンガリーの人たちは〝ハンガリーは東欧ではなく、中欧〟と言う。なるほど、ハンガリーはヨーロッパのほぼ中央にある。面積は北海道より一回り大きい程度で、内陸国なので海に近い国々より夏冬の温度差が大きく、降

水量も少ない。ハンガリーの自然を考える上で重要なことはヨーロッパ第二の大河ドナウ河が、国土のほぼ中央西寄りを貫流していることだと思う。大まかに見てドナウ河西岸地域（ローマ時代のパンノニア州に当る）は、ヨーロッパ・アルプスの東麓のはずれにあたり、ドナウの東側がいわゆるハンガリー大平原で、はるかな方、カルパチア山脈を経て南ロシアに連なるユーラシアのステップ地帯の西のはずれにあたる。その境界となっているドナウ河の西岸に、西側がブダ、東側がペストとして開けた道都ブダペストは、いわば自然環境の東西の接点でもある。

首都ブダペストには約二〇〇万人が住むが、全人口は約一千万人である。ハンガリー（マジャール）人は、言語的にはウラル・アルタイ系のフィン・ウゴル語族で、他の西欧諸国語のようにインド・ヨーロッパ語系ではないことが〝アジア系〟と言われるゆえんである。しかし見たところは西欧人、それもラテン的、南欧的風貌であり、陽気で開放的な国民性も、日常の生活文化もそうである。このことは、ハンガリーが歴史的、文化的にビザンツ、イタリア、フランスなどとの因縁浅からぬことをもの語っている。一五〇年に及ぶトルコの占領、二重帝国時代のハプスブルグ皇帝政府の厳しい統治下にありながら、トルコ色、ゲルマン色がうすいのは、誇り高き民族の資質と関係があろう。

ハンガリーの自然景観として有名な大平原は、長年農民にとっては苛酷な自然環境であった。大平原を蛇行して流れるドナウの支流ティサ河が春の氾濫をくり返し、夏の酷暑と乾燥は果てしない沼沢地と、塩分の多いひび割れた荒れ地をつくった。それがプスタであり、放牧の牛や馬の群、民俗衣裳の牧人、はねつるべなど牧歌的風景をくりひろげ、沼沢地は渡り鳥や水辺の動植物の格好の棲息地となっていた。前世紀末より大治水工事が営々として続けられ、運河や游水ダムがつくられると、元々雨の少ないこの地方のプスタは極度に乾燥していった。今日の大平原に見られる、緑豊かな牧野や小麦畑のあちこちに、給水と灌漑用の、巨大な金属のアドバルーンを立てたような揚水塔の点在する特異な景観はそのためである。一方で大平原のあちこちに残るプスタは国立公園に指定され、一部は特別自然保護区となった。その中でも有名なのが大平原の真只中に残るホルトバージュのプスタで、面積数万ヘクタール、水辺に飛来する渡り鳥の中には、珍しいヘラサギや黒コウノトリも見られるという。ホルトバージュは中世以来の家畜交易市場のあったところで、長大な角のある名産のハンガリー灰色牛やラツカ羊の放牧状態も見られる。

プスタ以外にも、ドナウ河や西岸地域にあるバラトン湖、フェルテー湖（ノイジードラー湖）の周辺にコウノトリが巣をかけた煙突のある家をよく見かけた。フェルテー湖北岸は現在オーストリア領だが、湖岸のルストという村は、軒なみコウノトリの巣があるので有名である。ハンガリーは昔からの農業国としての強みを活かして、慎重に近代化を進めているので、目下のところコウノトリとの共存を実現しているようだ。ルストのコウノトリ村が健在なのはオーストリア政府がフェルテー湖岸の開発を禁止しているためであろう。護岸や干拓工事が行き届いて沼沢地がなくなれば、コウノトリは追い払われることになる。しかし近頃はハンガリーの美味な魚料理の値上りがひどいので、これはバラトン湖やドナウ河の汚染でフォガシュ（淡水すずき）やポンチ（鯉）などの漁獲が減ったためではないかと思われる。とは言いながら、八つの流域関係諸国の生活上の利害がからむドナウ河の国際管理が、昔も今も変らぬ重大問題になっているのを見ると、ことは魚料理の値上りだけではすまされぬようである。

ところで現在、ルーマニアの国土の半分近くを占める広大な山と森のトランシルヴァニア地方は、昔はエルデーイというハンガリー国有の領土であり、ハンガリー文化の故地でもある。ルーマニア政府はこの地方の開発にまだ手が回らないのか、観光客の入りこみも少なく、エルデーイ公国時代の古都の歴史的環境も含め、自然環境もまた手つかずに保全されていると聞いている。

ハンガリーはまた温泉国でもあり、大平原地方を含め、全国に三七三の泉源があるという。とくに首都ブダペストは国際的な温泉都市で、泉源一二三、50℃以上の本格的温泉で豪華な宮殿風の建物内に浴場、プール、治療施設などを備えたものでも五カ所ある。温泉は保養と治療の施設として重視されており、日本のように歓楽施設ではない。昔から湯治というもっとも自然にかなった利用法のある日本では、温泉は人間と自然との貴重な出会いの場であることを再認識したいものである。

（UHB番組審議委員）

釧路湿原と周辺の草地
開発現地を見て

西村　格

今年は久しぶりに北海道を訪れ、釧路周

辺を見る機会を得た。そのことを含めて若干の感想を紙面を借りて述べさせていただく。

まず、千歳空港から札幌までの間で目に映ったのが十年前とは比較にならない緑の減少であった。それは良い面もあるかもしれないが、余りにも無秩序、無計画と思われる開発である。内地で緑の無くなった大都市を見馴れた人達は、緑が多いと考えるかもしれない。しかし、札幌の良さは緑に包まれた杜の都としてあったのではないかと思う。北国での緑地帯は、都市景観としての価値のほかに、冬の厳しい自然から人々を守る緩衝帯としての必要性もあり、なぜ札幌の人達がこれらを認識しないのか残念に思える。北海道をすべて内地並にすることを善とする思想はもう取り去っていただきたいものである。内地を見ていると、これから先、都市周辺を内地並にするということは良い環境に公害と自然破壊を持ち込むだけであり、北海道の良さを無くすことに通じるということではないかと考える。

釧路から別海にかけての根釧地方の酪農地帯にも、似たような現象がみられた。十年前には、ほとんどなかったトウモロコシ畑の増加である。この日本の草地農業地帯になぜデントコーンを、これほどに栽培して通年サイレージ方式を指導するのであろうか。気象環境からみたデントコーンの生産力は、札幌地方を一〇〇とすると根釧地方では五〇程度しかないことは周知のことである。この地方での安定した酪農には、牧草を中心とした草地酪農が最も適しているとしか思えない。内地で見られる酪農は農業ではなく搾乳業としか見えないものが多いのであり、北海道の土地に立脚した酪農は内地から見れば理想の農業の一つなのである。都市周辺にしても農業地帯についても、もう北海道は後進地域ではないということを、十分認識する時期ではないのかと思えてならない。

さて、ちょうど釧路湿原の周辺を見た翌日、環境庁長官が釧路湿原の国立公園指定に向けての調査を始めるとの談話が報道された。釧路湿原も北海道の残された自然としては、重要な地域の一つであろう。しかし、ツルを護ることはわれわれの自然環境を守ることに通ずる式の論理では、なかなか保護できる時代ではなくなっている。この湿原の価値を世界的な位置づけ、あるいは日本国内での位置づけで明らかにし、何がどのような状態にあることに保護の価値があるかを明確にして、論議を進めていただきたいと希望するものである。この状態の認識によって保護の方策・範囲はかなり異なる結論となると考えられるが、周辺の開発は早い速度で進んでおり、数千年かかってできた湿原は一度破壊すると復元は不可能である。釧路湿原周辺の人達が十分理解しうる理論づけが早くできて、早急に保護の手が延ばされることを期待するものである。

（農水省草地試験場）

恵庭から千歳へ

中村芳男

北海道の冬は早いときいていたがその通り、足ばやな秋はもう車窓から見る山葡萄の葉にそのしるしをまっかにみせている。つい二、三日前、植物園に寄ったとき辻井先生が、「みんなでリスが住みつくように努力してくれましてね、成功したんですよ」と教えて下さったので、それを見ながら、と思って園の奥の方へ行きかけたが、にわかに降りだした雨に追いたてられて門の方へ戻ったら「こっちにだっているんだよ」

というように、眼の前の小いさな屋根からひよいと降りて門扉にとまった。ツツと走っては止まり、また走りしながらやぶの中へ消えていったが、すぐ門前には自動車の往来がはげしかった。

車窓をうつり行く森林のさまざまを眺めているとその辺をやはり、リスが通りはせぬかとふと思った。

私の住む丹沢では

「林道工事で出来た土砂を谷間で埋めないように」と注文をつけたら、「それではお前のところの河原に地所をつくらせろ」ということになり、その土砂で埋めた多少の面積のある広場ができた。県の役人が「あれだけの広さがあれば県議の目につき、〝なぜあそばせておくのか〟と云われます」「なに、ロッテルダムへ行って見なさい、あそこでは港のヘドロを汲み揚げ汲み揚げして、そのヘドロにライン川流域のミズナラやブナの種子を播いたのが三十年たったら今日一と抱えもある大木の森林になり、マイナス六メートル地帯だったものがプラス六メートル、一八〇ヘクタールの広さの岡になっていますよ」と云った。と云う話をしたら、辻井先生は「恵庭岳もそんな長い目で見ていただくといいですね、植えつけた植生が二、三メートルになりましたかね」と云うお話だった。翌日、友人に恵庭岳を見に連れて行ってもらう約束だったのでよい話を聞いた、と思った。

さて、恵庭への道のことで土木業者か、土木事務所か知らぬが忠告したいと思った。

それは途中の道路の分岐点に何も注意書がないので、そのまま右の道をとった。美しい湖を下に見ながらよろこんでグランドホテル入口と書いてあるところへ行き、「土砂崩れのため通れぬ」と書いた頑強な構築物に出遇って戻ることを余儀なくされた。ああいうのは、やはり迂廻路の入り口に「何キロ先……不能」という風に指示がほしいもの、と思った。

なお、私どもの県では新たに林道を造るに当っては自然保護団体や受益団体等にはかって相談し、なお毎年伸びる範囲をさらに検討し「これでよいか」と念を押してすすめる、というようなこともしている。

帰りにインデアン水車というのを見た。「あれはまずい」と思わず言ったものだ。というのは入り口には数条の大駐車施設があり、その入り口から出口に土産品店が不規則にならび、川は全面的に堰き止め、鮭が一方に回転している水車のところへしか行けぬようになっている。そこへはいった鮭は全部雌雄に選りわけられて落ち口へ落とされる。

ここまで見える仕掛になっている。旅行者は皆これを見て「うまくやってるなア」と感心するのだが、見物台を降りて、猥雑(ワイザツ)にひしめく土産品店街を通ると、切り口剝き出しのままのいま殺した鮭をトラックいっぱい積んで来て、

「安いよ、安いよ！」などと云って売っていた。「ああ、見なければよかった」という声があちこちで聞こえるのは当然だろう。あれは考え直すべきではなかろうか。それに私が聞いているインデアン水車とは意味が違うように思った。

インデアンたちは自然物を獲りつくすようなことはしない。川を水車の方と従来のままの流れとの二すじにしておいて、水車にはいったのだけを獲る、ということだったと思う。もちろんインデアン達は、鮭の人工増殖は知らなかったろう。

かつてある会議の折、「鮭鱒の最終まで疎上できる川やイトウを絶対に獲らない川をつくってほしい、せめて国立公園内だけでも」と、自然保護局長に頼んだことがある。「漁協関係もあることですから、関係方面と話をして前進するようにしましょう」と云ってくれたが、どこまで進んでいることだろう。

辻井先生は、かつて

「昔はこの植物園の流れにまで鮭がのぼったものだそうです」と云っておられたが、この百万都市になる前の流れなら量も豊富、水もさらに綺麗だったろうから当然考えられる。が、このままで行けば、いまに日本の子供たちは、「鮭鱒は人間に腹をたち切ってもらって人工孵化をしてもらわなければ増えないもの」と思い込んでしまうのではなかろうかと思った。

そのあとで訪ねた友人・堀江さんのお子さんが通っている東白石小学校では、人工採卵後の卵の孵化から放流までを学童にやらせている、と聞いた。「もう一歩！魚はこうして生む」と云うことをこの子達なら現実に理解できるが、と思った（NHKだけに自然教育を委せないで）。

子供達にも自然の仕組みを理解させよう、われわれは自然保護憲章にそう謳ったのだから……。

そんなことをあれこれと考えこんでいるうちに、列車は網走湖の岸を走っていた。

（丹沢自然保護協会会長）

河川の自然保護

島田明英

ここ数年、豊平川にサケを登らせようという運動が行われている。この運動が自然保護運動と言えるかどうか疑問だが、河川が単なる排水路ではなく、生物の生活環境として大きな意味を持っているということを多くの人に認識させたとすれば、啓蒙的意義があったと思う。今後、この運動がサケをシンボルとする生態系全体の保全に向かうよう期待したい。

河川には治水、利水という大きな課題がある。治水、利水は必要なことであるから十分行わなければならないが、もう少し自然環境や景観の保全に気を配りつつ行えないものかと思う。

先日、野鳥の会で豊平川の河川管理関係者と話し合う機会があった。豊平川の河原はグラウンドや遊歩道、はては自動車教習所などになっており、野鳥をはじめ多くの生物が住めない状態になっている。既に利用されている区域は無理としても、今後整備する区域についてはなるべく自然のままの部分を残し、自然観察などに供する場所を作ってほしいと申し入れた。役所側から明確な解答は得られなかったが、このような市民の要望が強ければ作ることができそうだという印象を受けた。

森林や湿原は面である。川は線でありもともと面積が小さいのに、人間活動によって大きく改変させられている。しかし、川でなければ生活できない魚や鳥や虫や多くの生物がそこで生きている。何とか人間とそれらの生物との川の利用における調和を見出したいものだ。

（協会事務局）